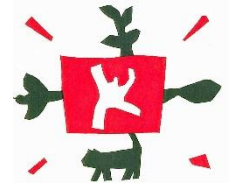


共同通信



2026 年 8 月 30 日 359 号 (569 号)

日本基督教団 西宮公同教会月報 〒662-0834 西宮市南昭和町 10-22

TEL 0798-67-4691 FAX 0798-63-4044、Email koudou@gamma.ocn.ne.jp

<http://koudou.jp/> 振替 01170-3-4901

To tell the story 258

説教「人生はいつも本物の楽しみには、本物の苦しみが隠れている」

マルコによる福音書第 12 章 28～34 節

「脱北」した 3 人の少年を描いた物語が「波の子どもたち」で、その作者がチョン・スユン、訳しているのが斎藤真理子です。

その作者と訳者の「往復書簡」が「言葉の森のかくれんぼ」です。その 2 信目、斎藤真理子からチョン・スユンへの「問」が、…「この前、打ち合わせのとき『韓国と日本では死生観が決定的に違うのでは?』というお話が出ましたが」で、チョン・スユンが、2 歳の時に亡くなった父のこと、そこで「死生観」につなげて、父のこと、更にそれを語る度紹介しているのが、井上ひさしの「父と暮らせば」(新潮文庫)です。

あれこれつながって、新潮文庫の戯曲「父と暮らせば」を読むことになりました。どんな動機で、どんな思いが結実して「父と暮らせば」になったのか、それは「前口上」で明らかにしています。

ぼんやり読み始めて、「なんだ、これは!」と思って、しばらくして気付いたのは、これは「生者」と「死者」の対話であることに気がきました。死者をして、存分にその「思い」を語らせるというのは「能」の表現方式です。かじった程度の能の理解ですが、たぶん、そうだったと思います。多田富雄の「脳の中の能舞台」で能をかじることになり、その多田富雄の「沖縄残月記」を見る為に沖縄まで出かけたことがあります。残酷を極めた沖縄戦の死者たちが、舞台に出てきて、思いを語るとするのが、「沖縄残月記」でした。死者が、それを語るということで、語ることがよりリアルになる、そんな能だったように思えます。

「父と暮らせば」は、原爆で残酷に死んだ父竹造と、その無残な死に無力だった娘、美津江が、それを語れば語る程、いつまでも終りにならない、原爆の残酷

が明らかになります。

そのことを明らかにしたい、井上ひさしの思いが、「前口上」で述べられます。

「あの 2 個の原子爆弾は、日本人の上に落とされたばかりでなく、人間の存在全体に落とされたものであると考える」

「20 世紀後半の世界中の人間を代表して地獄の炎で焼かれたのだ」「だから、被害者意識からではなく、世界 54 億の人間の一人として、あの地獄を知っているながら『知らないふりをする』は、何にもまして罪深い…」。

そんな「父と暮らせば」を韓国語に訳したのがチョン・スユンです。

「…私は泣いて、泣いて、泣きながら、本を読みました」。「藤の木の下で白ご飯を出した私の父と、襖の中から座布団を投げやる広島父が重なり、私はにわかに、そうか、私は父に愛されていたのかと悟りました。そして涙を拭きながら、こう決心したのです。国に戻ったら『父と暮らせば』を訳そう」。

ハンス・キュンクが、イエスの「地獄の十字架・死刑」について書いているのが、「イエス」の 5 章です。

「…奴隷や政治的反逆者に対するローマ式の（おそらくペルシャ人が発明した）恐ろしい処刑方法のことを、当時の誰もがあまりにもよく知っていた。罪人は横木に釘で打ちつけられた。その横木はあらかじめ突き立てられた支柱に据え付けられ、そこに足が釘か縄で固定された。…殴られ吊り下げられ血まみれになった者は、しばしば長い時間経ってから、時

には数日経ってから、出血多量か窒息によってようやく死んだ」。こんな事になったのは、これもハンス・キュンクによれば以下のようにになります。

「…彼は何にも由来せず、何にも根拠づけられず、独断で、言葉と行為によって神の意志（人間の幸せ）を告げ知らせ、神のテーマ（人間のテーマ）とを同一視し…」

こうして、人間の幸せを生きたイエスと、十字架の地獄を背負ったイエスは同一人物です。そんなイエスに出会い、心が開かれたことが、もしあるとするなら、「知らないふり」をしないのが、ハンス・キュンクの「イエス」です。

それらの事が、西宮公会館のパンフレット・ホームページなどになっています。

人間は生きものであり、自然の一部である

中村桂子

傾ける耳 涙する目 差し伸べる手

浜矩子

イエス・キリストのあとに従いながら、ひとは今日の世界で、真に人間らしく生きて、行動して、苦しんで、死んでいくことが出来る。

幸せな時も、不幸な時も、生きる時も、死ぬ時も、神に抱かれて、人々をおおいに助けながら。

ハンス・キュンク

祈ります。

（菅澤 邦明）

今月の畑だより

事務所が夏休みとなり、1 週、間が開いてしまい、園芸サークルの畑の活動も、8月11日（火、祝）は、休みとなりました。

そして、18 日（火）に久しぶりに出かけた「草茫々」の状態で、中でもエノコログサはたぶん 1m ぐらい伸びて、穂が半円形に伸びていたりしました。

何しろ、暑い事もあって、作業（多くは草抜き）は、30～40 分くらいを目途にしています。

そうして、草抜きをした畑に、いっぱいアカトンボが飛び交いますが、「急旋回」で方向転換しながら飛ぶ様子にビックリします。そして、それがとにかく、いっぱいアカトンボなのです。アカトンボは、そうして遊んでいる訳ではありません。「トンボは空のハンターです。」

「獲物をとらえるには、逃げる虫よりも速く飛び、追いつかなければなりません。」（「たくさんのふしぎ」空で生きる トンボ・2026 年 9 月号より）幼稚園の畑のアカトンボが、「急旋回」で方向転換し跳んでいるのは、「獲物」を捕らえるためです。

で、少し不思議なのは、東、北東、北の畑では、ほとんどトンボらしきものは飛んでいないのに、幼稚園の畑では、いっぱい飛んでいることです。東、北東、北の畑や田んぼには、ほとんど雑草がありません。1 本 1 草見られないというくらい、葉を伸ばしたらしい雑草も枯れて

しまっています。除草剤が撒かれているためです。

一方、お借りしている幼稚園の畑は、どこもここも、雑草で地面が覆われてしまっています。そんな畑に、2 週間ぶりに園芸サークルの人たちが入って、草抜きをしたため、びっくりした昆虫たちが飛び回って、それを目掛けて集まってきたアカトンボの群れだったようです。そうして湧き出るように集まったアカトンボは、一体、どこから集まってきたのか不思議です。

津門川には、今日も、シラサギ、アオサギ、（時にはカワセミ）などの水鳥たちが集まってきます。飛んできて、川に下りた鳥たちの目的は、いっぱい泳いでいる小魚たちです。

藻の中に隠れている小魚をちょんちょんと足でつつき、一瞬のうちに小魚をくわえ飲み込む様子は、見事です。



知ろうとする心

過去にもこの場で触れたことがあるかもしれませんが、最近の AI の進歩には本当に驚かされます。私のような機械音痴でも調べものをしたり、思考の整理を手伝ってくれたり、データ集約をしたり、外国語を翻訳したり。「ここまでできるのか」と思うことが増えました。

私は、今年の 4 月から日本語学校に配属となり、そこで働いているため、「何か国語話せるんですか？」と聞かれることがあります。事実、スタッフには 2 か国語話者は当然、3 か国語、4 か国語話者もいます。しかし、私自身は英語すらまともに話せません。ですから、その質問をされる時が結構辛いのです。

これまで何度も勉強しようとしてきました。英会話の本帳を買ったり、英語学習のアプリを始めたり、「今度こそ」と思うのですが、なかなか続きません。本屋さんの語学学習のコーナーに立ち寄ると、あれこれキャッチコピーを書いた本が並んでいて、またそれを買ってしまう自分がいます。そして本棚には中途半端に読んだ、そのような本がずらり・・・

翻訳 AI がどんどん進歩していくのを見ると、少し安心する自分もいます。

「もう無理に外国語を勉強しなくてもいいのではないかと、自分に都合よく考えたりもします。今は、スマートフォンに話しかければ、その場で外国語に翻訳してくれます。外国語で書かれた文章も、カメラを向ければ日本語になります。日

本で生活する外国人や旅行者はこれらをよく活用しています。

そうすると、こんな疑問が出てきます。「これからの時代、本当に外国語を学ぶ必要があるのだろうか」と。

また、それは日本語学校を運営する立場の人間としては、そもそもこの学校の存在意義を問うこととなり、複雑な心境にもなります。

だからこそ、私自身も考えさせられています。

現在、私が勤務している日本語学校には、約 30 の国や地域から学生が来ています。学生たちは、日本で進学したい、働きたいという夢や目標を持ち、毎日、漢字を覚え、文法を学び、会話の練習をしています。日本語はひらがな、カタカナ、漢字を使い分けることもあって、習得が難しい言語の 1 つとされています。

もし翻訳 AI がさらに進歩して、スマートフォン一つあれば誰とでも会話ができるようになったら、日本語を勉強する必要はなくなるのでしょうか。

でも、私は、そうではないと思っています。

毎日、学生と関わっていると、言葉を学ぶということは、単に情報をやり取りするためだけではないということを、改めて感じます。

言葉の向こうには、その言葉を話している「人」がいます。その人が育ってきた文化があり、歴史があり、家族があり、大切にしていることがあります。

外国語を学ぶということは、その人たちのことを知ろうとすることでもあるのではないかと思います。

私はこれまで 20 年近く、留学生や外国にルーツを持つ子どもたちと関わってきました。

20 年も関わっていると、「外国人のことはよく分かっているのでは」と思われるかもしれません。でも、全然そんなことはありません。今でも「そうなんだ！」と驚くことがありますし、「なぜそう考えるのだろうか？」と分からなくなることもあります。

むしろ、長く関われば関わるほど、「外国人」と一つの言葉でまとめること自体に無理があると感じます。

同じ国の出身でも、考え方は違います。育った地域も、家庭環境も、性格も違います。考えてみれば、日本人も同じですよ。『日本人はこうです』と言われても、『いや、私は違う』と思うことがあります。

それなのに私たちは、知らない人に対しては、つい大きなグループで見えてしまう傾向があると感じています。

「あの国の人はこうだ」

「外国人はこうだ」

「若い人はこうだ」

「高齢者はこうだ」

そうやって括って見てみると、なんだか分かった気になってしまいませんか？

でも、目の前にいるのは、一人の人です。頭では分かっているのですが、そう

括ったほうが楽というか、何か納得感があるというか。

私は長く外国人と関わる中で、さまざまな出来事を経験してきました。

ごみの分別をせず出して、地域の方から学校に苦情が入ったことがあります。学生が友人を部屋に集め、夜遅くまで話して近隣の方から連絡を受けたこともあります。自転車の交通ルールが分からず、注意を受けることもありました。

そういう時、まずは「日本で生活する以上、日本のルールを守るように」と伝えます。当然のことです。

でも、それだけではうまくいかないことがあります。

「なぜ分からないのだろう」と思う前に、その人がなぜそうしたのかを聞いてみる。すると、そもそもルールを知らなかった、日本語で説明を受けたけれど理解できなかった、自分の国では問題にならないことなので日本でも同じだと思っていた、ということがあります。

もちろん、事情を知ったからといって、何をしてもよいわけではありません。

でも、事情を知ると、伝え方は変わります。

「どうしてこんなことをするんだ」と思っていたものが、「そういうことだったのか」に変わることがあります。

母国では合法であったことが、日本では違法であったり、そもそも母国にはその法律そのものが無かったりすることも少なくありません。

私は、この「そういうことだったのか」という瞬間が、とても大切なのではないかと考えています。

これは外国人との関係だけではありません。

家族でも、職場でも、「なぜあの人はあんな言い方をするのだろう」、「普通に考えたら、こうするでしょう」、「普通に考えたらそんなことはしないのでは」と思うことがあります。でも、その「普通」は、本当にみんなにとっての普通なのでしょうか。

私なんかも、絶対に自分が普通だとは思っていません。でも、つい自分の物差しで見てしまって、相手に対してイライラしてしまうことがあります。

「相手を知ろうとする」ということは、何でも相手に合わせることではないし、相手の考えにすべて賛成するという意味でもないです。違うものは違う。意見が合わないこともある。それでも、「なぜこの人はそう考えるのだろう」と一度考えてみる。

私は、それが「知ろうとする」ということなのだと思います。違いがあるからこそ、『なぜだろう』と考える機会が生まれます。そして、その『知ろうとする姿勢』が、新しい気づきや出会いにつながっていくのではないのでしょうか。

もし、世の中みんな同じだったら、相手を「知ろう」と思う機会そのものが少なくなるのかもしれませんが、国籍や文化、年齢も、育った環境も、経験も、考

え方が違う人が同じ空間で生活するからこそ、

「なぜだろう」

「どうしてそう思うのだろう」

「もう少し話を聞いてみよう」

など考えるから、何か新しいことが生まれるのだと思います。

相手のことを完全に「知ること」はなかなかできないと思っています。自分のことすら十分に知っているとは思えない人間が、他人のことなんて、そんなに簡単には分らないと思います。20年近く外国人と関わってきた私も、分からないことばかりです。そもそも自分の家族のことだって、分かっているとは言えません。

でも、「知ろうとする」ことは出来ると思っています。

相手の話を聞くことはできます。自分の思い込みに気づくことはできます。

「私はこう思っていたけれど、違うかもしれない」と考えることもできます。

AI はこれからますます発達するでしょうし、翻訳の精度もさらに高くなるでしょう。

でも、AI がどれだけ進歩しても、相手を「知りたい」と思うかどうかは、私たち人間に委ねられていると思います。

翻訳機があれば、言葉の意味は分かるかもしれませんが、その人がなぜその言葉を言ったのか、どんな気持ちで言ったのか、その人がどんな背景を持っている

のか。そこまで知るためには、やはり相手に関心を持つ必要があると思います。

だから私は、英語がなかなか上達しなくても、もう少し学び続けたいと思っています。と言いながら、また三日坊主になるかもしれませんが…。

でも、完璧に話せるようになることだけが目的ではなく、自分とは違う誰かを、もう少し知りたい。その人が見ている世界を、少しでも知りたいと思っています。

繰り返しになりますが、私たちは、相手のことを全部知ることにはできないと思っています。

でも、大切なのは、「分からない」で終わらせないことではないでしょうか。

「なぜだろう」と思うこと

「もう少し知りたい」と思うこと

話を聞いてみること

知っていることよりも、知ろうとすること

私は、その心が、人と人との間にある壁を少し低くしてくれるのではないかとと思っています。そして、その小さな積み重ねが、互いを尊重し合う社会、平和な社会につながっていくことを願っています。

と、まあ、一見美しくまとめましたが、私自身も、まだまだできていません。

でも、だからこそ、これからも「知ろうとする心」は持ち続けたいと思っています。

(古谷 佳之)



山萩

あんなこと こんなこと

2026年7月21日(火)～22日(水)

後川子どもキャンプ

丹波篠山市後川

13人の子どもたちと一緒にでかけた後川でのキャンプ。2日間という短い時間でしたが、山に、川に、夏の自然をいっぱい楽しみました。



2026年7月29日(水)～8月2日(日)

沖縄キャンプ

沖縄県名護市・今帰仁村

5日間、沖縄に行かせていただきました。さまざまな人との出会い、いろいろな場所を訪れ、多くの学びと貴重な経験をさせていただきました。



2026年8月7日(金)18時～20時

関西神学塾

野田正彰先生「優性保護法違憲裁判騒ぎのまやかし」

西宮公同教会 集会室

21名もの参加のあった講座では、旧優生保護法の大きな対象であった精神障害者、特に統合失調症の人たちの被害が、裁判や報道の中で十分に語られていないことが指摘されていました。



2026年8月8日(土)10時～13時ごろ

水あそび・流しそうめん大会

教会学校の夏休みを「暑い夏なら、思いきり水であそぼう!」と、子ども22人、大人21人の老若男女、総勢43名が集まりました。プールでの水あそびの後、かき氷で涼み。そして、流しそうめん! 流れてくる素麺をキャッチしようと、子どもたちの目も手も大忙しです。最後には、すいか割りを楽しみました。



福島東電の事故 そこから考える

小豆川勝見さんは測り続けています
②

—先月号の続きです。小豆川さんは、東海村で働いていました。原発に近いポジションです。「原発は何重にも安全が確保されている」と考えていました。それだけに原発事故は、驚きでした。

今、お話したのは、トリチウムでしたが、普段、私たちが接するのはセシウムではないかと思います。セシウムを測るのに一番、便利なものは、ゲルマニウム半導体検出器です。これを使うとサンプルにあるセシウムを測ることができます。

(※ゲルマニウム半導体検出器は、ゲルマニウム半導体に放射線が当たると流れる電気を測るしくみで、放射線のエネルギーを正確に測定できるのが大きな特徴。自然界に元々存在しているウランなどの放射性物質から出る自然放射線と、原発などによる人工放射線を完全に識別して測定できる機械です)

最初のころは、結構いい加減な測定が、いっぱいありました。例えば、レタスを測る場合、レタスをそのままにして、とにかく測定器をレタスに差し込んでいる。これをもってして、「全然測定されなかったんで、このレタスは大丈夫です」とやっている人がいました。放射線を測る人間として、一番、許せないのがこういうやつです。

これをやっていたのは、誰もが知る某企業です。僕は、ここに連絡しました。そしたら「えっ、何か悪いんですか？」と言ってきました。

「あれで測ると、そもそも何キログラムで測っているか、わからないし、そこからの放射線の影響も受けちゃうし、あれは全然、正しく測れてないんです！」と言ったら、「えっ、悪いんですか」と言って、違う方法に改善してくれました。むしろ、いい企業です。

実は、いろいろと自分でオリジナルな測定法を確立して、「自分の方が正しいんだ！」と主張するところもあります。この企業さんに関しては、すぐに改善されました。これは、非常にエライと思います。

放射線の測り方については、いろんな人たちが、知識をためて、装置も良くなり、測定の方法としては、よくなってきました。機材も進化してきました。

次にわかりにくいのは、放射性物質の特徴です。そこをご説明させてもらいます。

放射性物質は、放射線を出します。セシウムの場合は、 β 線（電子線）ですからまっすぐに 光るように放射線を出してきます。電球だと思ってください。近くにいればいるほど、まぶしいなと思います。遠くにいればいるほど、ぼんやり光っていると、思います。

一番わかりやすいのが、今、皆さんがいる会場のライトです。場所によって明るさはそんなに差はないです。でもセシ

ウムは、排水溝や取水口みたいなところに溜まっていきます。だから強烈にライトがあるところがあるんです。スポットライトみたいな場所があります。

ここで現実に測ってみましょう。検出器を持った人、仮にあなただとしましょう。この検出器の性能がどんなに良くなったとしても、そこにセシウムがなければ、測ってみてもそんなに高い値が出ない。それだけで安心してしまうのです。ホットスポット的なものはないんだ思い込んでしまうんです。でもこの奥にセシウムが溜まった場所があれば、そこに近づけば影響が出ます。離れれば影響は少なくなります。遠くから見る限りでは、このスポットを評価することはできません。

つまり測定者が、「あそこに放射性物質が溜まっているな」と予想して測定しないとわからないわけです。

屋根の上の放射性物質は、雨によって雨どいを通して地表に移動し、地面や排水溝に流れ込みます。その水が流れずにたまりやすい場所や、雨樋から直接土壌に染み込むような場所は、放射性物質が蓄積して、マイクロホットスポットになりがちです。

そのスポットは分からないわけです。ここにいる皆さんは、「当たり前じゃん」と思うはずです。

でも違います。帰還困難区域の避難指示が解除されて、「安全ですよ。移住してくる方、どうぞ移住してきてください」となったときに、今、お話しした知識が

なかったりします。そうすると移住してきた皆さんにホットスポットから説明しなくてはならない。これはなかなか大変です。移住者は、最低限、放射性物質の特徴を知らなきゃいけない。だから教育ってすごく大事ななというふうに思います。

2014年10月18日時点での話です。中を測定するために帰還困難区域のゲートを開けてもらいました。中の数値を見てみましょうか。数値が1.71マイクロシーベルトでした。これは車内のリアルタイムの空間線量です。車内でこれだけの値ですから、結構高いなと思います。だんだんと奥に入っていくと2マイクロを超え、2.2マイクロぐらいまで上がりました。ここは未除染のエリアですからこんなものだと思います。

この場所だけはもうめっちゃくちゃ綺麗にするぞと決めた場所があります。例えば駅周辺や新しい役場を作るぞと決めたエリアは信じられないぐらい、何回も何回も除染をします。とんでもなく金と時間をかけて除染をします。

例えば大熊町役場の前です。2019年2月19日に測定しました。毎時0.06マイクロシーベルトでした。このエリアは、もともとそんなに高い汚染ではなかったのですが、それでもここまで下げるのには猛烈な努力が必要でした。ここまでの説明でどれだけ広く汚染が広がったのかを分かってもらうためです。

ホットスポットについてはこれから話します。

全てのスポットもなくなったのかなと思って見てみるとそうではないです。ちょっとでも草が深く茂っていたりするようなところでは9マイクロくらいありました。このあたりは高いだろうと予想して、さらに奥の方を測ると、ここで100超えですね。さらに測っていくと300マイクロです。こういう風に極端に差が出ています。

こういった線量が非常に高いところで作業員の方々が解体作業や除染作業をする時、ちゃんとマスクしていますか？いろんな方につたえていかなければと考えています。作業員の方も慣れちゃうとこんなに線量の高い場所でもマスクを外し、作業されている方が結構見受けられます。そういった方々にはもう少し放射線に対して注意をされることが大切だと思います。なぜならまだまだ線量のたかいところがあるからです。

放射能は目に見えないけれども、そのリスクをきちんとお伝えしているんですけれども、まだまだ十分に浸透していない現状です。伝えていくには、どうしたらよいのか、考え込んでいます。

(四方 哲)

※ロシナンテ社では、福島の間、原発問題について、PDF版「ロシナンテ通信」をインターネット配信しています。

年間購読代 3600 円 お申込みをよろしくお願ひいたします。shikatasatoshi@gmail.com



セッコウボク

～♪ぼくのみる空と きみのみる空は
つながっているから～

名護七曲（159）
「宇宙は何kmぐらい？」

「宇宙は何kmぐらい？」

【宇宙の大きさ】ってどのくらいなんだろう？と思って調べてみましたところ、いろいろ説はあるものの、地球から見た観測可能な宇宙の直径は約 930 億光年とのことらしいです▼「観測可能な」というのがちょっと意味が分からないのですが、宇宙の専門家の先生たちがそのように仰っているのでしょうから、今回はとりあえずこの約 930 光年説に則りまして宇宙の大きさについて考えてみたいと思います。

【光年】 これは光が 1 年かけて進む距離のことだそうです。が、このままではスケール感が掴みづらいので、もっと身近な「キロメートル」に直して計算してみたいと思います。ちなみに光は 1 秒間に約 30 万km進むそうです。かなり急いでますね。

【1 年は何秒？】 1 年を 365 日としましてエクセルで計算してみましたところ、1 年は 31,536,000 秒（3153 万 6000 秒）という結果になりました。

【1 光年は何km？】 これに 30 万kmを掛けますと 1 光年が何kmなのか分かります。これもエクセルで計算してみましょうね。少々お待ちください▼出ました。9,460,800,000,000 km。1 光年は 9 兆

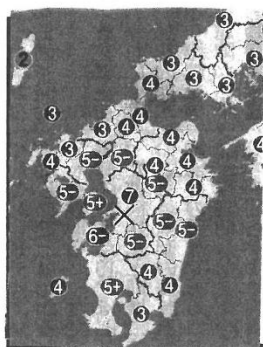
4608 億kmとういことらしいです。なんだか桁が段々凄いいことになってきたのですが、計算当たってますかね？

【宇宙は何km？】 さて問題はここからあります。私が知りたいのは「宇宙の大きさは何kmであるのか？」ということです。（観測可能な）宇宙の直径は約 930 億光年という説を信じまして、これに 9 兆 4,608 億kmを掛けますとその答が出るはずですよ。やってみたいと思います。少々お待ちください▼出ました。計算が間違っていなければ、宇宙の大きさは実に 879,854,400,000,000,000,000 km。えーと、これは何と読むのでしょうか？数えてみましょう。一、十、百、千、万、十万、百万、千万、一億、十億、百億、千億、一兆、十兆、百兆、千兆、一京、十京、百京、千京、一垓、十垓、百垓、千垓←これですね。8798 垓 5440 京km。当たってますかね？▼というわけで、宇宙の大きさは概ね 8800 垓kmであるということが分かりました！

なんかちょっと思ってたのと違う。もったい恒河沙とか那由他とか、そういうイカれた数字になるのかと思ったら、意外とそうでもなかったことに逆にちょっとびっくり。「全宇宙」だとまた全然話が変わってくるのかもしれませんが、誰がその「全宇宙」を決めるのかで揉めそう。

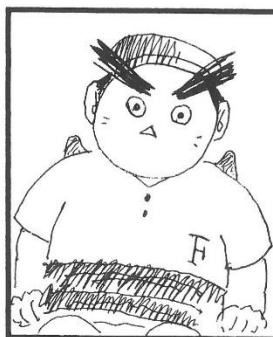
（羽柴 禎）

ん水にしてみても...



7月28日午後4時27分
九州・熊本県で
大きな地震が発生し、
つくば市で30人以上、
8千人超が避難生活を
余儀なくされています。

被災地の皆さん、
猛暑酷暑で二重三重
の災害ですが
どうかがんばり過ぎない
ようにして下さいね。



私たちも5年の震災
では日常が一変し大変
でした。
一日も早い平穏目指し
ともに立ち上がりましょ！

朝日新聞(2026.7/29)より引用～

あるひとのこと



故・西山和成さん
川柳作家
絵描き
身体障害者

さて、西山さんの作品の
数々です。ご紹介します。
●きみひとり こころのこころ
どうしよう
●あなたはおね ひとことおあい
うるさいよ
●うちに来て まだみぬめを
みせてくれ
ほんの一部ですが...

●あさはやく あのひとおいて
まちをでる
●かみきしく こんなことする
かみもいる
●かみさまに おねがいしても
いやなかあ
西山さんのアール・ブリコラ
(独学独創)の世界を
ご堪能下さい。

絵会：西山和成さん

有難うございました。



『西山和成川柳集/きょうも あいもあさても』より引用～

つとかいわ・あれこれ

教会学校の夏の報告の中でも沖縄の報告で、沖縄・沖縄の人たちがとかくすべてにおいて「政治的」という批判について、少し反論らしき事を書きました。国・ヤマトが仕掛ける政治、辺野古新米軍基地建設、台湾有事など、兵庫県・西宮あたりに住んでいると、遠いというか、日常の生活では現実味のとぼしかったりする事も、沖縄では、目の前で繰り広げられている時、その事と、何かを発言することが「政治的」「すべてにおいて政治的」となってしまう。でも、特に今あれこれ決められたりしている事は、実はとっても政治的ではあるのです。「国旗」の扱いに関する事、武器の輸出を解禁したりすること、防衛費の大幅な増額、憲法中でも9条を変えようとする事などが、多数派の人たちの政治政策で進められているのは、とても、とても政治的な事です。沖縄の人たちが、振りかかってくる政治に、声を発し続けるのを「政治的に過ぎる」と批判するものの、自らはほぼ黙り込んで、違和感だけは口にします。

政治については、その世界に発言ないし足を踏み入れることは、個人的な事情もあって、ずっとひかえてきました。それが少し変わることになったのは市来とも子さんが、政治、いわゆる選挙に積極的にに関わり、それに引きずられるようにして始まったように思えます。市来とも子さんは、選挙で敗北してもめげず、東京区議会議員、更に衆議院と、たとえ敗れても政治の世界を歩み続けています。その市来とも子さんからの合図があって、安田まりさんの選挙、そのつながりで、兵庫県議会選挙での、小西ひろのりさんの応援へとつながって行きました。

小西ひろのりさんの立憲民主党は、先の国政選挙で、新しい党を作ってしまうという、一般には理解の難しいことをやっけてしまいました。何が難しいかと言うと、その成り立ち、基本的な政治についての考え方が違うのですから一つの党を名乗るということはあり得なかったはず。既存の党は党として、大きなワケ組み、個々の政策に違いがあっても、「連帯する」ということはあり得ると思えますが、それらを吹っ飛ばしているのですから、一般には解りにくかったし、今もそれはそんなに変わりません。

そんな状況で、小西ひろのりさんへの支持はし続けること、ただし、ただ支持しますではなく、支持する側の考え方、立ち位置ははっきりさせる必要があります。

で、7月末に、小西ひろのりさんを支持する集まりがあったので、以下のようなメッセージを届けさせてもらいました。

政治が権力を振りかざす時代になってしまいました。

一日一日を、一人の人として政治を担い、歩み続けるのが、小西宏典さんです。

小西宏典さんの「傾ける耳、涙する目、差し伸べる手」は、「立憲」を生きる人としての歩みのそのものです。

誰かが、「傾ける耳、涙する目、差し伸べる手」を生きるのであれば、その誰かは、誰であれ、連帯する仲間です。

「立憲」を生き、「傾ける耳、涙する目、差し伸べる手」を生きる小西宏典さんを応援しています。

ささやかなものですが、「こにしひろのり」をお届けします。あなたの胸に付け、連帯する仲間になってください。

2026年7月30日
西宮公会教会

もし誰あれ、「傾ける耳」「涙する目」「差し伸べる手」ということで、それを今ここで、今ここで生活する人たちとの出会い、つながりの中で、自分もまた生きるのであれば、その人たちと「連帯する」ということを願って届けさせていただいたメッセージです。

(K)

先日読み終えた本の中の史実に関する箇所のある事を、もう少し詳しく知りたくなって、確か以前にそれについての本を買っていたはずだと思って、探すも見つからない…。なんせ、田川先生もサザエさんも一緒くたのゴチャゴチャ状態の本棚なので、大変。おまけに、奥行きがあるので、手前にある本を次々に床に放り出して、奥側を探すのが一向に見つからない。そのうち疲れてくるし、いい加減面倒になって、床にある目についた本をバラバラとめくっているうちに、夢中になってしまい、探し物は見つからず仕舞いのまま1日が潰れる。結局、諦めの方が勝って、放り出された本は、未だにだらしく床を占拠中。その上、またまたアマゾンで注文していた本が届いてしまったのだ。どうにかしなきゃ。床に放置されたままの本の片付けが、私の目下の夏休みの宿題。

(S)

今年の沖縄キャンプは、子どもたちの居ない、大人4人だけのキャンプとなりました。でも、気心の知れた「愉快な仲間たち」4人。いつもとは少し違う、ゆったりとした大人旅の始まりです。

陶芸家の松島さんを訪ね、土に触れる面白さを教

えていただいたり、初めて首里城を訪れたり。鮮やかな朱色の壁に目を見張りながら、まだ修復中の姿を見て、秋の完成が楽しみになりました。

読谷村では富樫さんお会いし、昔から琉球の人たちが大切に守ってきた場所（西森御嶽）へ案内していただきました。簡単には人が立ち入ることのできない場所で、その土地に込められた歴史や想いについて、お話を聞くことが出来ました。

次の日には、沖縄北部へ。アキノ隊員と一緒に歩きながら、草木や葉っぱ、生きものたちの話を聞きました。途中では川に足を入れて、ひと休み。自然の中で過ごす、気持ちのいい時間でした。

キャンプ場の目の前には、どこまでも透き通るような遠浅の海が広がっていました。海を眺めながら、何もしない時間を楽しみました。時計を気にすることなく、沖縄のゆったりとした時間の流れに、心まで委ねるような穏やかなひとときでした。

一方で、今回の旅は美しい自然だけではない沖縄に触れる時間でもありました。

戦争が終わって 80 年以上が過ぎた今も、その記憶や歴史を抱えながら、今日を生きている沖縄の人たちがいます。辺野古のゲート前では、たくさんの人たちが集まる「県民集会」にも立ち会いました。

美しい海、あふれるような緑、そこに暮らす人たちの出会い。そのすぐそばに、沖縄が歩んできた歴史と、今なお続いているさまざまな現実があることを、改めて感じました。

そして旅の最後の夜には、うるま市でエイサーのお祭りへ。間近で響く力強い太鼓の音と、全身でぶつかってくるような踊りの迫力に、自然と心が高鳴り、旅の終わりにふさわしい高揚感に包まれました。

もちろん、旅の楽しみは「食」にも。今回の5日間で、なんと沖縄そばを4回もいただきました。お店によって、だしの味も麺も少しずつ違って、「今日も沖縄そば！」と言いながら、これがまた飽きることなく、美味しい。沖縄そば好きの私にとっては、なんとも幸せな5日間でした。

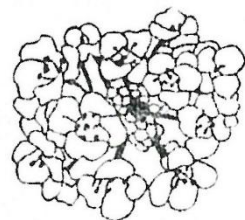
あつという間の5日間。たくさんの人と出会い、いろいろな場所を訪ね、沖縄の自然に触れ、歴史や今を知り、そして海を眺めながらゆっくり過ごす。そして、沖縄そばもしっかり味わう。

学ぶ時間も、心が弾む時間も、静かに自分と向き合う時間もあった、大人4人の「愉快的仲間たち」の沖縄キャンプ。あふれるような自然の圧倒的な美しさと、その中で確かに今を生きる人たちの姿。その両方に出会えたことが、今回の旅で最も深く心に残った体験の一つになりました。

そして最後に、今回 5 日間を通してずっと一緒くださった羽柴 禎先生（名護伝道所）をはじめ、お会いしてくださった皆さまに心より感謝申し上げます。皆さまのおかげで、充実した時間を過ごすこと

ができました。本当にありがとうございました。

(K)



アリッサム